演題番号
（事務局にて準備）

飼い主のPerceived Growth and Happiness（PGH）変容と伴侶犬の臨床指標改善の関連性

— 自己調整療法（Self-Regulation Therapy; SRT）介入前後の観察研究 —

角谷留実 1)　櫻井辰徳 1)
1) サニーズアニマルクリニック　　筆頭演者：角谷留実

本研究のメッセージ — この研究を通しての想い

「全人的医療」のさらに先へ ～動物と人間の双方向の改善～

飼い主と動物は、互いに良くなっていく — 双方向の相乗効果、One Health、One for all, all for one

① はじめに・SRT｜見えにくいものが結果を左右する

見えにくい要因
- 精神的ストレス
- 過去のトラウマ
- 腸内細菌のバランス

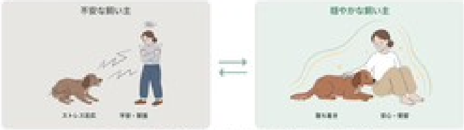
→

見えやすい結果
- 症状の再発・慢性化
- がん・糖尿病
- 検査結果の異常

構造が見えにくいため、そこへのアプローチは遅れ、後回しになりやすい

動物医療でも同じ構造を経験してきた — 薬や手術を繰り返しても、同じ症状が再発する。動物は飼い主がつくった環境に左右され、その環境は飼い主の潜在意識やストレスに影響される。

飼い主と伴侶犬の情動は結びつく（情動伝播）


不安な飼い主
ストレス反応
不安・緊張
穏やかな飼い主
落ち着き
安心・受容

情動伝播 [1][2]・慢性ストレスの長期連鎖 [3]・皮膚/消化器/行動の問題 [4] [5]・One Health [6]

SRT（自己調整療法）｜飼い主にアプローチし、動物を改善させる根本治療

行わないこと
- ✗ 投薬・サプリ
- ✗ 手術
- ✗ ワクチン

→

行うこと
1. 内受容感覚の回復と気づきの促進
2. 「過剰適応」を是正する認知的・行動的介入
3. 飼い主の自己統制感の回復を起点として、ペットとの生活環境の調和を図る

本研究は、この治療結果を題材にした「経過報告」— 治療法の優劣を主張するものではない

② 目的・対象・方法｜64組をSRT前後で比較

目的：3つのギャップを、3つの方法で埋める

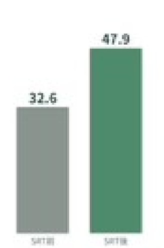
飼い主心理の定量尺度がない	→ **PGHスコア**
介入前後の動物指標を見た研究が稀	→ **動物の臨床指標**
言葉と動物の変化の統合分析がない	→ **言動10カテゴリ**

位置づけ：単群前後比較の観察研究。効果の証明ではなく「関連性の提示」と「仮説生成」。

③ 飼い主の変化｜PGHスコアは +15.3点 上昇（n=64）

PGHスコア（平均、14–70点）

SD：前 [illegible] → 後 [illegible]　p < 0.001



+15.3点
平均変化量

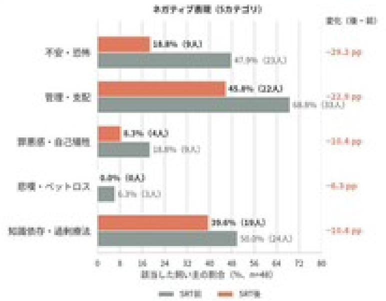
d = 1.90
非常に大きな効果量

95.3%
改善（61/64例）

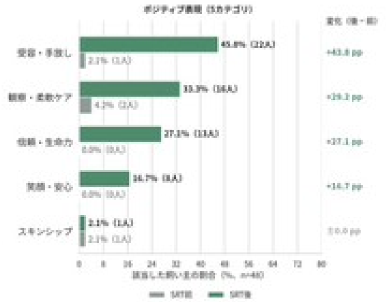
20.3%
Stage IV 到達（13例）

④ 飼い主の言葉｜「管理・不安」から「受容・信頼」へ

ネガティブ表現（5カテゴリ）



ポジティブ表現（5カテゴリ）



ネガティブ表現は減り、ポジティブ表現は増えた。「受容・手放し」2.1%→45.8%（+43.8pp）

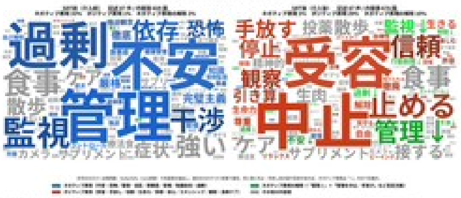
共感形語彙↑ → PGH改善↑　ρ = 0.269

寄り添う・見守る・感じる

Spearman順位相関 p = 0.032（n=64）

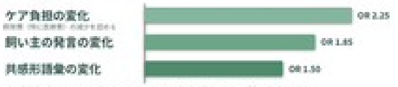
有意な正の相関

飼い主の自由記述（食事・ケア/接し方）のワードクラウド：SRT前後の比較



青＝ポジティブ表現、赤＝ネガティブ表現、緑＝ネガティブ表現の解除（「監視↓」＝監視を中止／手放す）。文字の大きさ＝出現頻度

高改善（ΔPGH≥20）を分ける要因：ロジスティック回帰（判別精度 84.4%）



重回帰分析 R² = 0.579：PGH変化量の分散の 57.9% を説明。最大の寄与は「介入前PGHの低さ」

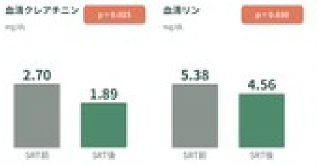
⑤ 動物の変化・時系列｜動物の改善もともに観察された

	SRT前	SRT（介入）	SRT後
飼い主	PGH 32.6点（平均） Stage I・II が 84% ネガティブ表現が中心（管理 69%）	飼い主への働きかけ 対話 内省 環境の見直し	PGH 47.9点（+15.3、p<0.001） Stage III・IV が 50% ポジティブ表現へ（受容・手放し 46%）
動物	腎機能指標が高値 Cre 2.70・P 5.38 mg/dL 過剰な管理・監視の下で暮らす（症例）		腎機能指標が有意に低下（n=35） Cre 1.89（p=0.025）・P 4.56（p=0.030） 見守られ落ち着いた暮らし（症例）

ともに改善方向が認められた（前後2時点の比較、経過時期は症例ごとに異なる）。起点は決めず、双方向の可能性を残す

飼い主の変化 → 動物の心身状態　／　動物の改善 → 飼い主の安心・精神状態

動物の腎機能指標も SRT 前後で改善した（n=35）

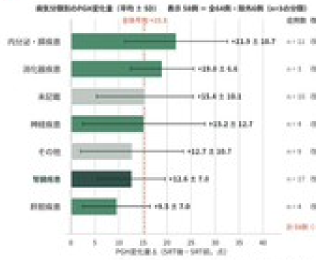


有意差なし
BUN 41.99 → 34.57（p=0.26）
ALT 95.96 → 123.35（p=0.43）

解釈補助の視点：腸内環境と腎機能は相互に影響しうる。腸内細菌叢の調査は今後の課題

因果ではなく、飼い主の変化と動物の改善が「ともに観察された」所見（観察時期は症例ごとに異なる）

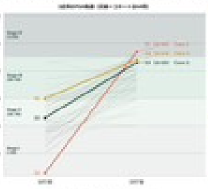
どの病態でも、飼い主のPGHは改善した（表示58例）



[illegible]

内分泌・腫瘍性（n=11）で最大 +21.5点。介入前PGHが27.3点と低く、心理負荷が高い群ほど改善余地が大きい。
腎臓疾患（n=17）+12.6点、改善率100%。
n=3 の分類の検出は限界、部数値は探索的（n=3〜17）

症例提示｜3つの改善パターン（匿名化3例）



Case 1｜劇的改善型
中型犬・内分泌腫瘍
徹底的な健康管理 → 笑顔で接し、投薬・サプリを大幅削減

Case 2｜典型的改善型
小型犬・神経疾患
極度の緊張・過干渉 → 冷静に観察し、見守る

Case 3｜ステージ内改善型
超小型犬・肝胆疾患
0.01g単位の計量・記録 → 停止、散歩制限解除（ケアの引き算）

⑥ 考察・限界・結論｜仮説と今後の検証

考察｜機序に関する仮説：認知 → 行動 → 生理の3層モデル

第1層 認知　不安・管理 → 受容・信頼
飼い主の認知が、受容・手放し・信頼へ転換

第2層 行動　過剰なケアの引き算
過剰な計量・頻回投薬 → 生命力を信頼する柔軟なケア

第3層 生理　副交感神経優位 → 動物のHPA軸鎮静
情動伝播を介し、腎臓・電解質に影響する可能性

[illegible]

限界と展望｜本研究は「仮説の出発点」、次は対照群と客観指標へ

本研究（現在）	単群前後比較・観察研究／因果は断定できない／n=3〜4のサブグループ／語彙ベースの限界／測定時点の不一致・欠損／自己評価は飼い主の主観
次のステップ	待機リスト対照・RCT／唾液コルチゾール・心拍変動／3時点以上の縦断解析（LMM）
将来	LLMによる文脈考慮型コーディング／多施設・多種（猫・馬）へ拡張／情動伝播の生理学的基盤／腸内細菌叢の調査

結論｜飼い主の変化と、動物の改善が、ともに観察された

1. **飼い主のPGHスコアは上昇し、言葉はネガティブ表現からポジティブ表現へ変わった**　+15.3点
PGH平均 32.6点 → 47.9点、+15.3点（p<0.001、n=64）

2. **共感の言葉が増えた飼い主ほど、PGHが改善した（正の相関）**　ρ = 0.269
Spearman ρ=0.269（p=0.032、n=64）／同じコホートの SRT 前後で、動物の Cre・P も有意に低下（n=35）

3. **飼い主の変化（PGH・言葉）と、動物の改善が、ともに観察された**　ともに観察された変化
因果の方向は未検証（単群前後比較の観察研究。経過時期は症例ごとに異なる）

本研究が生んだ仮説

動物の健康のサインは、病院の検査室だけでなく、飼い主との日々の暮らしの中にある。

因果関係の断定はできない。対照群を設けたRCTと客観的バイオマーカーによる検証が今後の課題。

終わりに｜飼い主と動物は、互いに良くなっていく

飼い主 ⇄ **動物**

双方向の相乗効果
動物が良くなることで飼い主も安心し精神状態が変わる。
飼い主が変化することで、動物の心身状態が変わりうる。

One Health
（ヒト・動物・環境の健康を一体として捉える）
人間だけでなく全生物を対象にした概念がこれから必要。

COI 表示
筆頭演者：角谷留実
演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。本研究は特定の研究助成を受けていません。

主要文献：1) Sundman L et al. PLoS One 2017;12:e0170707.　2) Sundman AS, et al. Sci Rep 2019;9:7281.　3) Buttner AP, et al. Physiol Behav 2015;147:54-62.　4) Dreschel NA. Appl Anim Behav Sci 2010;125:157-162.　5) Mackenzie JS, et al. Trop Med Infect Dis 2019;4:88.　6) Hays RD, et al. Qual Life Res 2009;18:873-880.　7) Hayes SC, et al. Behav Res Ther 2006;44:1-25.　謝辞：研究参加にご同意いただいた飼い主の皆様、臨床データ収集にご協力いただいたサニーズアニマルクリニックのスタッフ各位に感謝いたします。